ミニシリーズ

ネパール帰国研修員活動視察報告 ＜その２＞

本邦研修で習得した栽培知識技術の現地活用

本シリーズでは 2014 年 12 月に「小農支援のための野菜栽培技術とマーケティング手法」コースの業務の一環として実施した、ネパール帰国研修員の活動視察について報告している。今回は第 2 報として、本邦研修で習得した知識技術の現地での活用事例をまとめた。

本邦研修で習得した野菜栽培知識技術の現地活用

帰国研修員が最も多く認めた有用技術はトマトの雨よけ（施設）栽培であった。今回の視察では実際に帰国研修員が農家に対し、トマトの雨よけ栽培を指導している場面を視察することができたが、トマトの茎径の変化や開花果房と成長点との距離から生育診断をする様子は研修で学んだことそのままであり、現場で活用されているのを見てうれしく思った。

トマトの生育診断をする
帰国研修員（左）

現在ネパールではトマトの雨よけ栽培は広く普及しており、研修で学ぶ施設トマト栽培はすぐに適用可能な知識・技術となっている。一方、前の世代の帰国研修員にとっては少し違う見解があった。彼らが受講した当時は芯止まりトマトの露地放任栽培が主流で、施設トマト栽培はすぐには活用できる技術ではなかった。しかし、2004 年ころから急速にトマトの雨よけ・整枝誘引栽培が広まると、その栽培法を知る普及員として、頼られる存在になったとのことである。

交配種トマトの採種技術についても同様であり、かつてはネパールで適用できる技術ではなかったが、近年交配種が育種開発されたことに伴い、農家に交配種の採種指導ができる人材が求められて来ている。

これらの事例から、現地で有用とされる技術には大きく二つあることがわかる。ひとつは「今すぐに現地に適用できる技術」であり、もうひとつは「将来に役立つ技術」である。研修ではこれらを考慮したカリキュラムを組んでいるが、それが適当であったと考える。

今後は、高価な交配種種子の普及に伴い、効率的な育苗技術や、雨よけトマト栽培の連作障害である線虫被害の対策としての接ぎ木技術などが有用となるのではないかとの意見が帰国研修員から挙げられた。

野菜以外の作物への応用事例

本邦研修で学んだ経験を他の作物に活用している事例も確認できた。2012 年の帰国研修員はカルダモン苗の栽培に関わっているが、カルダモンは初期生育が遅く、雑草との競合に弱く、また土壌の乾燥・高温にも弱いという特徴から、黒マルチ栽培の適応を思い立ったのは研修での野菜のマルチ栽培の経験があったからとのことであった。

植物生理に基づく栽培技術の適用は野菜栽培のみならず、すべての作物生産に共通する考え方である。彼はよくその点を理解し、新たな苗作り技術の開発に取り組んでいた。

その他の普及活動

栽培現場から離れた管理業務に就いている研修員にとっては、本邦研修で学んだ野菜栽培技術を活用する機会に制限がある。しかしながら、農家に対する講習会等で日本での栽培事例を紹介し、また研修で実施した栽培実験を機関誌に執筆するなど、様々な場面で研修成果を活用していることが分かった。

帰国研修員とのグループ討議の中で、ときおり本邦研修の課題として挙げられる「栽培環境の違い」について、意見を求めた。その結果「そもそも知識や技術は適用する環境に合わせて、応用することが大切であり、それらを実践するのは我々、技術者の役目」との意見が多勢を占めた。

研修で学んだ知識・技術を現地で活用するためには、研修時から、異なる環境に適用させることを前提に、基礎知識をベースに応用力を育むことが重要である、と我々は考えているが、今回、上記のような意見が帰国研修員から得られたことは、我々の研修方針がよく伝わっていたものと考えられる。

本邦研修で習得した栽培知識技術の現地活用事例

野菜栽培技術分野での活用事例	野菜以外の作物への栽培技術分野での活用事例
・トマトの雨よけ（施設）栽培技術指導 (6) 整枝誘引、生育診断、病害虫診断技術 ・野菜採種技術指導 交配種トマト採種技術 (5)、タマネギ採種技術 (3)、キュウリ採種技術 ・バレイショ栽培技術 (3) 種芋消毒技術、無病種芋増殖、栽植密度・肥料試験 ・接ぎ木技術紹介 (3) ・セル苗育苗試験実施 (2)　など多数	・ビートに対するマルチ試験の設定 ・カルダモン苗生産への黒マルチの適用 ・カルダモン苗生産の生育診断・病害虫診断
	その他の普及活動
	・農家に対する香辛料作物・果樹栽培研修に野菜栽培のトピックを付加 (3) ・本邦研修で実施した実験を機関誌に執筆

注）調査対象は帰国研修員10名、カッコ内は事例数